

番場遺跡について

調査期間：平成 30 年 5 月 9 日～10 月 15 日

調査面積：3,060 m²

調査原因：真桑幼児園移転（真桑小学校北）

船来山南麓の扇状地に立地する遺跡です。調査地からは船来山古墳群を望むことが出来、船来山西麓が良く見える場所です。遺跡内では平成 19 年度からの分布調査の際には、須恵器、土師器、山茶碗等が大量に採取されました。

当遺跡には字「番場」という小字が残されており、東西方向に東山道が通っていた位置にあります。古から交通の要所であったことが予想され、周辺にも濃密な遺跡の分布が確認されています。

今回の調査地より南へ 300m の場所には県史跡「宗慶大塚古墳」があります。昭和 63 年の真正町教育委員会の範囲確認調査により、古墳時代前期の前方後円墳であることが分かりました。全長約 63m、時代も 3 世紀後半にさかのぼる古墳時代の中でもたいへん古い古墳ではないかとも言われています。

過去の周辺での岐阜県教育委員会による本発掘調査（平成 26 年度 県道関ヶ原線拡幅に伴う調査）、市の試掘確認調査・本調査（平成 22 年度～ 個人住宅建設に伴う調査等）では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡、大型溝状遺構、掘立柱建物跡、土坑等が出土しており、弥生時代終末期から古墳時代にかけて集落が広がっていた可能性が考えられます。

番場遺跡周辺は扇状地と沖積低地との境に立地するほか、南へむけて地形が徐々に傾斜して下がっていく境の重要な地域にあたります。また犀川、五六川、中川等の河川が東西に南北方向に流れており、河川の影響を受けた地域であるほか、居住域も限られた可能性も考えられます。

2. 今回の調査成果について

今回の調査では竪穴住居跡が 73 軒出土しました。このほか弥生時代終末期の方形周溝墓の可能性のある遺構、大溝、古代の掘立て柱建物跡が出土しており、時代も弥生時代終末期・古墳時代初頭の時期（3 世紀後半）から古代（8 世紀）の時期まで多岐にわたっています。とくに古代の住居跡が多く出土しており、遺跡の中心時期は奈良時代後半から平安時代初頭の 8 世紀後半に求められるのではないかと考えられます。

古代のモトスについては、大宝戸籍の成立（702 年、本巢郡栗酢太里）、席田郡建郡（715 年）等がありますが、特に番場遺跡周辺の本巢市軽海、宗慶周辺は本巢郡栗酢太里の比定地とされており（参考文献 鈴木正信「残された戸籍と比定地 本巢郡栗栖太里」『美濃国戸籍の総合的研究』東京堂出版、2003 年）、今回の出土内容についても古代の遺物遺構が多いことから、何らかの関係があるのではないかと考えられます。

※調査成果は現段階までの検討を基にしています。今後の調査の進展により内容の改変もあります。十分ご留意ください。